〔特別寄稿〕

加曽利貝塚博物館への期待とあり方

清　水　潤　三

I

わが国屈指の大貝塚として知られ、考古学研究史の上に輝やかしい足跡を残す加曽利貝塚に、このたび博物館が誕生したことは、昭和39年以来、この貝塚の発掘調査に参加してきた一人として、まことに喜びにたえない次第である。

いま、博物館としての建物と展示の整備が一段落を告げ、「貝塚博物館紀要」の刊行にまで進展を見たことは、いよいよこの博物館の今後の発展を約束するものとして、欣快にたえないことはいうまでもあるまい。それと同時に、この加曽利貝塚博物館の使命、あるいは将来のあるべき姿について、この時点において十分に思いをめぐらし、遺憾なきを期するべきであると信ずる。

今日の産業社会の高度かつ急速な伸長は、わが国の経済的な繁栄にもとづくものとして慶賀すべきではあるが、他方において、それに伴う各種の造成工事があまりにも活発におこなわれ、貴重な文化遺産が次つぎに失われるという事態を招くにいたった。この加曽利貝塚も、その危機に見舞われ、破壊に瀕したことは衆知のとおりである。さいわいにも、多くの識者によって保存の努力がなされ、いちおう消滅をまぬがれ、さらに博物館の建設にまでおよんだことは、類の少ない文化財の救済保存に成功した好例として、長く記憶されるべきであるし、関係者に感謝し、またその功を讃えるものである。

II

さて本題に入って、加曽利貝塚博物館のあり方について考えてみよう。従来、博物館は社会教育機関であり、資料の保存機関としての役割を果すべきものだといわれてきた。たしかに、昭和39・40年度の大発掘による出土品がすべて収蔵され、後者の役割は果されることになっている。資料の散逸によって、価値を大巾に失なった遺跡の多いことを思うならば、幸いとせねばならない。前者についても、立派な陳列室と陳列ケースが備えられ、すぐれた展示がなされているから、教育的効果が年と共に向上することは疑いない。しかし、これらをもって能事終れりとするわけにはゆかないと思われる。たとえ望蜀のそしりを受けようとも、わたくしには、まだ望んでやまぬ面が残されている。

一般に、博物館が独自の研究をおこない、斯学のリーダーとなるべきだという考えが、わが国ではどうも稀薄のように思われる。藤田亮策先生が生前、力説されたのもこの点についてであった。諸外国における常識が、どうしてわが国では失なわれ、博物館は単なる古物の物置と化してしまうのであろうか。

忌憚なくいわせてもらうならば、この加曽利貝塚博物館にしても、完成と同時にこの途へ迷いこむ危険があるのではないかと恐れられてくる。みづからが研究した成果を展示してこそ、観客にアピールするのであって、漫然と常識的な陳列をつづけたのでは、それは社会教育にも専門教育にも貢献するところが乏しいのではなかろうか。ほかでは見ることのできないような研究成果を挙げうる研究機関に育ってほしいと、わたくしは切にねがうのである。

III

研究機関といっても、ぼう大な施設や人員を要求するものではない。まず、加曽利貝塚の研究において、他に比肩するものがないという域に、早く達してもらいたいのである。また、条件が許すならば、千葉市を中心とする東京湾沿岸の貝塚について総合的な研究をおこなってもらえれば、満足だと思う。

それには、必ずしも、研究者をやたらに多数擁する必要はなく、少数情鋭主義（といっても、最低５～６人は必要であろうが）で結構だから、千

葉市周辺の貝塚については、この博物館を利用しなければ語ることができない、ということになって欲しいというのである。これは、加曽利貝塚自体の研究のためにも、その展示のためにも当然必要なことであり、わたくしは決して不可能な事だとは思わないのである。

この博物館を中核として、いま述べたような範囲で、資料の収集がなされ、着実な研究が積み重ねられて、この地域の考古学の資料センターという形をとることによって、この博物館の意義が高揚されることを信じて疑わない。そして、その研究内容の高度な点において、他に比類のない、わが国において範とされるべき博物館に、1日も早く成長してほしいものである。

Ⅳ

さらに、わたくしの期待をもう少し発展させることをお許し願いたい。

過日、ある人びとから、この博物館を見学したが、質問に答えてもらえるような状態ではないように思えた、との苦言を耳にした。はなはだ申しにくいことではあるが、わたしは、それを聞いて愕然とした。博物館は教育機関であって、とくに社会教育に重点がおかれていることは、いまさら博物館法を持ち出すまでもなく自明の理である。専門家にも、もちろん高度な質問とそれに対する解答が必要ではあるが、それ以前に、青少年や一般の社会人に対しては、基礎知識の不足からして、十分な指導が不可欠である。これを欠く時は、かえって興味を失なわせ、考古学に脊を向けさせるおそれなしとしない。広く考古学の知識を普及することによって、まず文化財の保護を徹底させることが、今日焦眉の急と考えられるから、この課題はきわめて重要である。

もちろん、この教育に当る者が無責任な素人であってはならない。いかに門前の小僧が習わぬ経を覚えても、その仏典を講義することはできないたとえで、聞きかじり、口真似の説明では教育にならないのであって、そのような素人の解説は利用者にとって大きな迷惑といわねばなるまい。

聞けば、この博物館の専門職員、研究と教育にたずさわるべき学芸員がたった1人だけだという。しかも、博物館の運営にも、当然専門的な知識や経験が必要であるが、そのような該当者が不在のため、その1人の学芸員が実質的な館長の業務まで代行しているといった状態であるという。これでは、博物館本来の任務を果すことはほとんど不可能に近い。いかに優秀な学芸員といっても、1人の能力には限界がある。まず、社会教育機関として、この博物館が一般に公開されている以上、1日も早く学芸員を補充して、いかにして観覧者の熱心な質問に答えるかという難問を、直ちに検討していただきたいと思う。そして、そのような実質的な体験と、専門的な業績をもった学芸員の中から、優秀な館長が選ばれ、この博物館の本来の使命や、わたくしたちの期待に十分こたえうるような運営をしていただきたいと、切に希ってやまない者である。

最後に苦言めいたことを述べて、まことに恐縮ではあるが、わたくしの加曽利貝塚博物館に対する希望と期待ということになれば、そしてわたくしの愛着が深いからには、ぜひとも以上のことを語らざるをえなかったまでである。

（千葉市加曽利貝塚博物館協議会委員
慶応義塾大学文学部教授・考古学）